



## 「第1回島会議」三宅島で開催！

### 東京宝島事業と島会議について

2018年からスタートした東京宝島事業。東京の島々が持つ素晴らしい景観や特産品、文化などを、これまで以上に有効活用して更なる魅力拡大を図ることを目的に、東京11島の住民の方々が主役となり「東京宝島ブランド」を作り、磨き上げ、広く発信し、島の高付加価値化を実現しようという取組です。この事業の一環として、各島（2018年度は大島（おおしま）・神津島（こうづしま）・三宅島（みやけじま）・八丈島（はちじょうじま）にてブランド化に向けた議論を行う場「島会議」を実施。それぞれの島で、様々な取組をされている方にお集まりいただき、2018年度内で5回の島会議を開催します。

9月18日、三宅島の阿古港船客待合所「ココポート」2階で第1回の「島会議」が開かれました。その模様をレポートします。



### 「東京宝島」事業ガイダンス

「島会議」は、島を支える事業・産業に関わる人たちや、日頃から島の活性化に取り組む住民が集まり、領域の垣根を超えて、島のブランド化について話し合う場。2018年度からスタートした東京都の「東京宝島事業」の一環として、年5回の実施を予定しています。

「島会議」では、それぞれの島の住民自身が自らの島の宝を見つめ、議論や共有を進めていきます。また、それだけではなく、都心でのフィールドワークを通して学び、必要に応じて外部の専門家の協力も得ながら、これからの島づくりを考え、島のブランド化・高付加価値化を目指すという、これまで東京の島々で行われてきた地域振興事業とは異なる取組となります。

9月11日、三宅島の阿古（あこ）港船客待合所「ココポート」2

階で、第1回島会議が開催。自然ガイドや民宿など観光業、農家や漁師など一次産業の担い手、島の事業をサポートする金融業など、様々な業種の12人のメンバーが集まりました。



はじめに島会議開催のご挨拶があり、事業を担当する東京都 総務局 行政部 池野大介事業調整担当課長が「東京の島しょ地域には様々な魅力があるが、地理的要因等から、それらを十分に活かしてきていないという側面もある。そうした課題も踏まえ、島しょの宝物に付加価値をつけていくための戦略を練っていくことが、この会議の目的の一つ。その主役は皆さん自身。専門家によるバックアップもしていくので、是非この場を活用し、島全体を盛り上げていく取組として欲しい」とメンバーへ呼びかけました。続いて、事業のガイダンスとして、事務局より島会議の目的や年間の会議の流れを説明後、アイスブレイクへ。

### 「他己紹介」でお互いを知り、可能性を発見

島会議の話し合いを始める前に、普段はなかなか話すことのない、それぞれの活動の背景にある想いなども共有できるよう、アイスブレイクとして自己紹介ならぬ「他己紹介」の時間を設けました。他己紹介では、会議メンバーが3人ずつに分かれて4組のグループになり、メンバー同士がお互いのことを質問し合い、後ほど全員の前でお互いを紹介します。



集まったメンバーは全員がそれぞれ顔見知りで、互いの仕事や活動についても何となく知ってはいる関係。質問を交わしながら、普段は聞くことのなかった相手の想いに触れて新鮮な一面を感じたり、自分の活動とリンクする可能性を発見する時間となりました。

#### 4つの個性が光る「コラボレーションアイデア」

4つのグループ毎に、「他己紹介」と併せて「これからの島をもっと魅力的にするためにどうすればいいか」というテーマで、3人それぞれ異なる事業分野を活かしたコラボレーション企画を考え、発表してもらいました。



「大人がドルフィンスイムやダイビングを楽しむ間、子どもたちを観光農園で預かり、収穫体験をして夜は家族でバーベキューを楽しんでもらう」「宿泊客向けに明日葉農園ツアーを組み、宿の料理でも提供する」「若者の起業を応援する仕組みをつくる」「海産物や生花などの一次産品を島外に発信・販売する」など、メンバーの専門性や今後取組みたいことを反映した具体的な企画

アイデアが披露され、三宅島での他業種連携の可能性が感じられました。

#### 島の魅力を編集するブランディング。先行事例も紹介



島会議の話し合いに向けた準備運動としての他己紹介を終えて、島会議の目的である「島のブランド化」について意識共有するため、事務局より「ブランド」や「ブランディング」についてプレゼンテーションがあり、具体的例として他島での取組事例も紹介しました。

プレゼンテーションでは、「島のブランディングとは、島の魅力を編集すること」とし、島に暮らす人たち自身が「今の延長線上の未来予測」ではなく「理想を具現化する未来創造」に取り組んだ事例として、奄美群島（あまみぐんとう | 鹿児島）の沖永良部島（おきのえらぶじま）の取組を紹介。

島の住民が自ら集まり、主体的に話し合う中でさまざまな分科会が生まれ、他業種での連携が進むとともに、100年先の子孫たちに魅力ある島を受け継ぐための振興計画「Island Plus（アイランドプラス）」などをつくり上げた沖永良部島の取組は、先ほどのアイスブレイクでの姿や、「島会議」が目指すものと重なりました。



東京宝島  
TOKYO  
TREASURE ISLANDS



### さまざまな島の宝を見つめる「グループワーク」



続いて、会議メンバーが2組に分かれ、各自が未来に受け継いでいきたい「島の宝」を書き出し、話し合いながら1枚の紙にまとめるグループワークを実施。一人ずつ自分が特に残したいと思う「島の宝」について発表しました。

Aチームからは、「基幹産業である第一次産業が潤わないと島も潤わないので、農業は残していきたい大切なもの。そのためには、農業が魅力的な産業であること、島で農家をやっても稼いでいけることを伝えていかなければいけない」という意見があり、その他にも、一升瓶（島で酒といえば一升瓶が基本）・火山・メジナ釣り・心太（ところてん）・管理されていない、フェンスのない崖のような大自然の景観・人の暮らしを支える病院などが残していきたい島の宝として挙がりました。



Bチームからは、「島の魅力的なコンテンツはたくさんあるが、島への思いがある良質なファンや繰り返し来島してくれるリピーターを大事にしていきたいし、さらに増やしていきたい。島が好きで、何度も来て、島を伝え、守ってくれるような人たちがどんどん増えていけば、島自体の可能性も高まると思う」という発表

がありました。その他にも、季節ごとの祭・巨木と火山・ガクアジサイ・海など、三宅島ならではの自然環境・風景などが多く挙がりました。



これらの内容を受け、事務局から「さまざまな魅力が挙がったが、それぞれがつながっていると思う。島の暮らしと自然のつながりなど、関係を表現することで芯の通った取組になると思う」と振り返りました。



## 参加者の声



伊藤 奨さん 一般社団法人アットアイランド 代表理事

「多様な事業者がフラットに島のことを話し合える場をつくりたいと思っていたので、今回の島会議に賛同しコーディネーターとして関わることにしました。第1回の島会議をやってみて、参加者同士、普段は改まって聞けない話ができたとと思う。会議の空気をつくるのは参加しているメンバー自身なので、この先の東京宝島会議やフィールドワークも自分から積極的に楽しみ、話しやすい雰囲気をつくっていききたいと思います」



神戸晴行さん 農業研修生

「普段の生活では農家の方々との関わりが主なので、今回の島会議に参加し、他の参加者の考えに触れて刺激になりました。自分を含め島への移住者が増えつつあるので、そういった立場からの声も反映していけたらと思います」



谷井重夫さん 三宅島観光協会 事務局長

「日々仕事でいろんな島の方と接していますが、意外とじっくりお話しできていないと感じていました。島会議への参加は、領域を超えて交流でき、お互いの思いを語り合える良い機会になりました。三宅島の島会議を、東京の島々で連携するステップにしていけたらと思っています」